

# 演劇『美食家』

幻のプロトタイプ(2021年10月作)

「中出ししなさいよ」

彼女は鬼のような顔しかしなくなった。

こんにちわ、僕はピザ屋です。ちょっと見栄をはったかな・・・  
ピザの、配達員、です。

手紙を入れた小瓶を海に放つみたいな気持ちでこれを書いています、  
誰か受けとってくれているのでしょうか。

先述した言葉「中出ししなさいよ」が僕が最も皆さんに受け取って欲しかった言葉です。  
僕の言葉というか、彼女の言葉なのですが、傷つきました。

萎えた鳩はびしょ濡れ、という歌詞がありました。  
そういう僕のイチモツ。を罵るみたいに吐き捨てられた言葉です。

カラオケボックスで、無理やりにさせられた時です。  
付き合って6年でもうそんなことしたくないけれど彼女は色々もう限界みたいで  
36歳ってそういう歳なんですかね・・・。

僕は32歳なんですけど、一人ではできるんですけど、  
どうも彼女の怖い顔を見ると鬼にしか見えなくて  
目を瞑って日テレの岩田アナさんを想像すれば挿れるまではなんとかなるんですが、  
彼女のゴリラの吠え声が耳に入るともう萎えた鳩ってというか・・・共感いただけますか。

僕の父は脳梗塞と心筋梗塞で口がきけなくてあまり動けなくて高校出たからすぐピザ屋

その話に涙して僕から離れなくなった共感力の強い優しい彼女はもういません。

ユミと言います。

指輪、が欲しいと叫ばれたこともあります。

これを読んでいる人は男の人か、女の人か、違う形で二つの共感を得られるでしょうか。  
僕への共感なのか、彼女への共感なのか、まだそんな次元ではありませんかね・・・。

怒らないで最後まで、読んでもらえたら嬉しいです。

秋くらいからでしょうか。とある美食家から毎週木曜日にピザが注文されます。

最後の便、20:00。

高層マンションに住むその美食家と関係を持つようになったのも、その、秋からです。

「舌で一回お尻の穴を舐めさせてもらえたら5千円。舌、往復で1万。どうかな。」

玄関でそう誘われました。

仕事を頼みたいの切り口から、こんな話あるのかって、  
左手を広げた上にあるピザの平箱が熱いし頭がおかしくなりそうでした。

「やりません」

で済ませられたのは2回目の木曜日まででした。

言い訳じゃないけど、  
僕は、物心ついた時からお父さんがカチコチに動かないから、  
口もきけないから、  
お父さんがいるんだけど  
いる、だけというか。

だからお父さんと同じくらいの歳のおじさんが遠いっていうか。  
いや、僕もこのまま生きていくから遠近の問題じゃなくなって  
それそのものになるんだけど・・・

だから、美食家の突然の至近距離があまりにも近かった。  
新鮮というか、面食らうというか、かき立てられるというか・・・

美食家はいつだってクアトロフォルマッジLでした。

指輪、が欲しい、って脳内再生されるユミちゃんの言葉に背中を押されて  
3回目の木曜日  
美食家の部屋に入ってしまったんです。

物がとても少ない、白を基調に整えられた綺麗なリビングでした。

あの時はまだ「この人なんか見たことあるな」ってくらいだったんです。  
でも、その部屋に入った時「ああ、この人は多分、著名な文化人なんだろうな」とわかりました。  
そういう部屋でした。

お尻を剥いて、四つん這いになって、お肉を自分でひろげて、  
すぐその後ろに美食家が四つん這いになって  
つん、と一瞬舐められました。

その時が、美食家を美食家と思い出したときです。  
幼い頃に母と見た旅番組の Reporter だったことを思い出しました。

「まだ、平気そう？」真後ろから問うてくる美食家に「平気です」と答えました。

この一回で取れるだけお金をとってやろうと思いました。何度も踏み入れる場所じゃない。

しかし、その日は2万円で終わりました。たった2往復。  
「まだ、平気です」と伝えましたが「もう、味がしないから」と断られました。

なんとなく気持ち悪かったので、  
少し四つん這いのまま唾液が乾くのを待ってパンツを履きました。

ティッシュをもらって、拭いたら、  
なんというか、皮膚に唾液がさすり込まれる気がしたのもありますし、  
ヘタな交流をはかってしまったら、僕の感情がどうなるかわからない怖さというか。

まだ、読んでくださってますか。頑張ってください。

彼女の誕生日でしたから、  
そのお金で彼女をお寿司屋さんに連れて行きました。

なんだかずっと機嫌が悪いユミちゃんもこの日は上機嫌で大好きな穴子をぱくぱくぱくぱく、  
本当に美味しそうに食べました。

ユミちゃん、面と向かっては言えないけど、  
僕はユミちゃんを幸せにできる方法を持っていません。

ユミちゃんも僕も幸せになれる、そんな方法があるのかもしれないけど、  
僕は、方法以前に、幸せがわかりません。

誰が読んでいるのかわからないのに恥ずかしくないです。

はっきり書きますし、わかって欲しいです。

幸せがわかりません。

そういう僕は、一人ではないと、思ってもらえることを願ってますし、共感を願ってます。

ユミちゃんの幸せは、僕と僕の子供と時々寿司を食うことでしょうか。  
薬指にダイヤモンドつけて穴子を食うことでしょうか。

一生勃つ気しねえ。  
本当に、一生、勃つ気がしないんです。

実際は多少勃つことが物事を複雑にしている。

穴子食わせるためにアナル食われる。

文才が、まるでない。才能が何かあれば幸せを認識できたりしたんでしょうか。

どう思いますか。

次の木曜日は美食家の注文が入ってから、  
ピザ屋のトイレで家から持ってきておいたボディソープでお尻の穴を洗ってから  
マンションに向かいました。